

表出の記号学

—カール・ビューラーの『表出理論』をめぐる—

山 取 清

1. はじめに

記号学（または記号論）の歴史を詳しく辿ろうとすると、結局は膨大な百科事典のような記述になってしまうかもしれない。記号学的な着想は遅くともすでにプラトンやアリストテレス、あるいはアウグスティヌスにまで遡ることができるし、古代の占星術や医術等にも記号学の思想の萌芽を見ることができるからである。そもそも記号学を独立した「学問」とみなすことができるのかという疑問もこの辺りから湧いてくるのに違いない。学問の歴史が一般に細分化の歴史でもある中で、人間活動のあらゆる領域と関わるといふ守備範囲の広さは、記号学の命であると同時に、学問としての自立性を脅かす要因ともみなされる。しかし記号学は、対象となるものの実質や範囲によって領域が明確に区切られた既存の多くの学問分野とは異なり、むしろ多様な不特定の対象と取り組む方法論自体に存在の根拠を主張する学問なのである。言語が人間のあらゆる文化的活動の源泉であるとするならば、その言語の本質である記号的性質を扱おうとする記号学は、自然科学に対する数学の関係のように、精神科学において極めて抽象的で原理的な役割を求める学問と位置付けることができるであろうか。いずれにせよ人間生活に関わる様々な記号との取り組みがこれほどの長い歴史を持つにもかかわらず、記号学が「学問」としての道を歩み始めるのはようやく20世紀に入ってからのことである。

時代の図式に照らして眺めるならば、ソシュール（Ferdinand de Saussure, 1857-1913）の『一般言語学講義』（1916）¹も、合理主義あるいは自然科学を万能とする風潮へのアンチテーゼの1つであり、ソシュールがそこで言語学を記号学との関係において定義しようとしたことは、社会

科学としての言語学の学問的自立を保障する原理を模索する試みであった。ソシュールは『一般言語学講義』の序説で「もし言語活動を一時に数面から研究するならば、言語学の対象は、たがいに脈絡のない混質物の寄せ集めとなる」²として、「なにをさしおいてもまず言語の土地の上に腰をすえ、これをもって言語活動のいっさいの現われの規範とすべきである」³と主張している。つまりソシュールにとって言語は社会制度の1つであるが、単にすべての点において他に類似する制度ではなく、言語がその他の人間的事象の中心に位置付けられるべきであると考えられたのであった。

言語は観念を表現する記号の体系であり、そうとすれば、書とか、聾啞者の指話法とか、象徴的儀式とか、作法とか、軍用信号とかと、比較されうるものである。ただそれはこれらの体系のうちでもっとも重要なものである⁴。

ソシュールにとって記号学と言語学との関係はこのように自明のものであったはずであるが、ソシュールの死による研究の中断により、記号学と言語学との関係はその後ほとんど顧みられなくなってしまった。このような経過を踏まえて、ソシュールの影響をこの点に絞って見ると、ビューラー（Karl Bühler, 1879-1963）とソシュールの関係には、従来の言語学史では取り上げられなかったもう1つの側面が浮かんでくる。ソシュール以後の言語学者達がこぞって言語体系の共時的・構造的解明に精力を傾けた中で、ビューラーが『一般言語学講義』で暗示された「一般記号学」の構想にいち早く着目していたことにここではまず注目したい。言語の問題はビューラーにとって研究生生活の初期の頃からの主要な課題であったが、彼自身は言語学者ではなく心理学者であったことで、むしろ「自分の研究分野において記号的なものが通常の意味での言語を越えて多種多様に広がっているのが分かる」⁵とも述べている。この言葉からも窺えるように、彼の関心は当初から広い意味での言語現象に関わる問題に向けられていた。

2. 記号学における叙述と表出

1931年4月ハンブルクで開催された第12回ドイツ心理学会の全体テーマは「言語」であり、報告者にはカッシーラー (Ernst Cassirer, 1874-1945) やヴァイスゲルバー (Leo Weisgerber, 1899-1985) を始めとする心理学以外の分野の研究者の名前が見られる。会議の議長でもあったビューラーは、「私たちは言語 (die Sprache) という単数形を用い、その名称が法律 (das Recht)・芸術 (die Kunst)・科学 (die Wissenschaft) という名称と同じように理解されることを前提とする」⁶と提言し、異なる分野の研究者による様々な立場からの研究が、ソシュールが恐れた言語学の自立性の喪失よりもむしろ言語という対象の究明を促進することに役立つことを強調している。ビューラー自身前年にプラハで開かれた国際音韻論会議に出席しており、それが彼の研究に大きな影響を与えていたからであった。

ビューラーの研究は1934年に出版された『言語理論』⁷の中の「オルガノンモデル」(Organonmodell) によって一般に知られるようになったが、この「オルガノンモデル」が初めて公表されたのはハンブルクの会議での報告においてである。ビューラーはその中でソシュールが『一般言語学講義』で示した「ラング」(langue)・「パロール」(parole)・「ランゲージュ」(langage) という3つの概念を取り上げ、これらをドイツ語でそれぞれ「言語形成体」(Sprachgebilde)・「発話行動」(Sprechhandlung)・「記号的交流」(Zeichen-Verkehr) という言葉に訳している。「オルガノンモデル」がこれら3つの側面すべてを集約しているという意味では、ビューラーの理論はソシュールの学説を抜きにしては語れない。ただ「オルガノンモデル」はビューラーの言語研究において幾つかの段階を経て形成されたものであり、決してソシュールの学説のみが唯一の下敷きになっているというわけではない。『言語理論』でも指摘しているように、ビューラーは『一般言語学講義』が未完成の書物であることもすでに十分認識した上で、ソシュールが提起した記号学の構想を仕上げることを、そして自身の言語研究をその理論的体系に即して整理することを重要なテーマとして位置付けていたのである。

ビューラーの『言語理論』とソシュールの『一般言語学講義』との考え方の違いは幾つか指摘することができるが、最も大きな違いは、ソシュールでは言語の社会的制度としての面が強調されるのに対して、「オルガノンモデル」に示されるように、ビューラーでは記号の意味論的機能が現象学的な仕方で捉えられていることである。ただ、ビューラーが言語の機能に関する考察を詳しく取り扱ったのは、1918年の文の定義についての論文が最初で、ソシュールの『一般言語学講義』を知るずっと以前のことである⁸。ビューラーはその論文で、人間の言語には「告知」(Kundgabe)・「喚起」(Auslösung)・「叙述」(Darstellung)という三重の機能があり、人間の言語を動物の言語と分かつのは「叙述」の面であると唱える。また、そこでは心理学者として子供の言語の発達をつぶさに観察することによって得られた経験によって主張が裏付けられている。それによれば、人間の子供は生まれてほぼ3カ月ぐらい経つと口の中で何か舌足らずなおしゃべりのような動作を始める。これは本能的なもので、子供は、気分のいい時に、その後は絶えず発声器官を働かせ、偶然の変異を繰り返しながら、次第にたくさんの音声の素材とそれらのコンビネーションを覚えていき、やがて mamam, papa, dada 等の喃語が形成される。これらは「叫び声のように最初からある特定の表出価値があつて、それらと共に変動するようなものではなく、自由で、その後の更なる発達を手に入れることができる」⁹という特質を持つ。また、この機能は、痛みや怒りに伴う叫び、あるいは雌鶏が雛を誘うときの鳴き声とは違って、音声を送り手と受け手に結び付ける自然な因果関係に還元できるものではなく、「ただ数学で組み合わせ (Zuordnung) 呼ばれるような関係にしか還元できない。つまり名称 (Name) は対象 (Gegenstand) に、そして命題文 (Aussagesatz) は事態 (Sachverhalt) に組み合わせられている」¹⁰と考えられる。ビューラーは人間の言語にのみ特有のこのような異種の機能を「叙述」という用語で捉えようとしたのである。子供の言語習得をめぐるこの考察は後に「オルガノンモデル」の図式化へとつながっていくが、ここではまだ記号学的な表現は具体的には用いられていない。しかし1923年の論文『言語の叙述の概念について』¹¹では次のような記述が見られる。

それ自体の感覚的に知覚できる特徴によって表示対象 (Repräsentat) を構成するのに役立つ表示手段 (Repräsentant) と、これを行わず、ただそれらの結合と関係、例えばある種の秩序内におけるそれらの位置を叙述という仕事に投入するもう1つの表示手段がある¹²。

引用文中で使われている「表示対象」と「表示手段」という用語は、ソシュールの「シニフィエ」(signifié)と「シニフィアン」(signifiant)に読み替えることも可能である。しかしこの論文ではソシュールに関する言及はまだまったく見られないことから、用語そのものの由来は『一般言語学講義』とは直接には関係がないように思われる。しかしここで更に重要なのは「記号」という術語の使用をめぐってソシュールとビューラーの間に微妙な食い違いが見られることである。周知のように、ソシュールは「シニフィエ」と「シニフィアン」の結び付きが慣習的・社会的な性質のものであることを強調し、言語学はこの「恣意性」(arbitraire)の原理に支配されると定義した。しかしビューラーは、「あらゆる種類の現象・活動も記号として機能し得ること、全世界が人間にとって物的記号に満ちていたように、かつては文化生活全体が象徴的行動に満ちていた」¹³と述べ、「記号」をまず人間文化の発達史との関連から捉える。そして更に現象学的・発生論的な見方に基づいて、「言語はその中心にあって未分化の意味論的諸機能の全てに関わったが、この関与の痕跡は今日でも言語に具わっている」¹⁴として、むしろソシュールとは逆に言語の機能的多様性に眼を向けるのである。

「告知」や「喚起」と呼ばれる機能では、記号は「送り手」と「受け手」との関連で何らかのものを指している (anzeigen) とみなされる。これは例えば気圧計の変動・雨蛙の鳴き声・通風の痛み等が嵐の接近の予兆と解釈できるのと基本的に同じであり、これらの現象では何かが別の何かの「徴候」(Symptom)として働いている。ビューラーはこれらの「徴候」も記号の1種として捉え、「微標」(Anzeichen)という名称を与える。これに対して、「叙述」の機能はまったく異なる原理に基づいている。例えば、同じ形をしたボールを区別しようとする場合、対象そ

のものには他と区別できる特徴がないので、 $a \cdot b \cdot c \cdot d$ という「位置記号」(Platzzeichen)を目印として付けて整理する。すなわちここでは対象に人為的に付加された記号によってある種の秩序が形成される。この種の記号は、1) 対象への付加、2) 対象との関係の固定、3) 対象が現存しない条件での推測の可能性という3つの段階で発達すると考えられ、言語による「叙述」もこの「秩序記号」(Ordnungszeichen)の働きとして理解することができる。記号における慣習的性質の認識は、ビューラーにとっても人間の言語の最も重要な側面であり、フッサール(Edmund Husserl, 1859-1938)の現象学の取捨選択の原理¹⁵、更に「音韻論」(Phonologie)の法則に裏付けられて「抽象的有意性」(abstraktive Relevanz)の原理として確立される¹⁶。これはソシュールの言う「恣意性」の原理と基本的に同じ観点に立っている。ただソシュールの『一般言語学講義』では「恣意性」の原理の重要性は強調されているが、その一方で記号の機能における自然的な結び付きに関わる「有縁化」(motivation)¹⁷の問題は、体系内の辞項間の「相対的有縁化」(motivation relative)の現象に言及されているにすぎない。それどころか「恣意性に徹しきらないところがある」¹⁸という理由で、むしろ「象徴」(symbole)という語を「記号」の意味で使用することを避けてすらいるのである。しかしビューラーでは「代理機能」(stellvertretende Funktion)という観点に記号的なものの原点をまず認め、そこから意味論的機能の差異に対応して2種類の記号を用語の上でも積極的に区別し、言語記号に対してもそれと同じ機能的定義を適用している。おそらくこの点はビューラーの言語学および言語研究における先見性の1つとして銘記されてもかまわないであろう。

『人間の発話』(1925/28)¹⁹の著者として知られるビューラーと同時代の言語哲学者アマン(Hermann Ammann, 1885-1956)の指摘によれば、ビューラーの論文をいくつか検討すると、基本的構想に重要な変化が見られることが分かる。アマンが目にするのはまず用語上の問題である²⁰。最初ビューラーは「叙述」以外の機能を「告知」(Kundgabe)と「喚起」(Auslösung)という相関術語で表していたが、これを「表出」(Ausdruck)と「呼びかけ」(Appell)という用語に切り替えている。ア

マンによれば、「表出」という用語の採用は、発信者との関係で見た記号の機能を単に伝達という面のみに限定せず、発信者の内面という主観的側面も記号から読み取ることができることを強調する意図があった。また「呼びかけ」という用語も社会行動学の研究成果を意識したもので、受信者から見た記号の機能が単に記号の機械的な受信ではなく、主体的に知覚され、判断されるという面を表している。特に「表出」の問題に関しては、プラハ言語学サークルの機関誌に投稿された論文『音声学と音韻論』（1931）でも次のような記述が見られる。

人間の性格学（Charakterologie）は単なる統計学的な相関関係の事実には満足しない。様々な音素に最も単純な性格あるいは性格の構成要素を発見した音韻論も、これと同様に単なる統計学的な相関関係の事実にはほとんど満足してはならず、純粋に素材として見れば互いに独立して変化する音声の諸特徴の間に現存する種々の結合の仕方と自由度の根拠をその分野で発見するために、様々な方法論を見つけられるかどうかにかまわないう²¹。

すなわちビューラーによる提案は音韻論の分野で2つの可能性を認めるというものである。これらは記号の「叙述」機能に関与する「目印」（Notae）として働く「音素」（Phoneme）の一覧を作成する部門と、例えばドイツ語では長音と狭口、短音と開口という特徴が母音では同時に出現するように、示差的特徴同士の結合に見られるある種の組織的な傾向を確認したり、あるいはメロディー、リズム、明暗等のその都度の状況や条件に対応して変動する要因を究明する部門から成り立つ。この提案はその後トゥルベツコイ（Trubetzkoy, 1890-1938）の『音韻論の原理』（1938）²²にも取り上げられ、「音＝文体論」（Lautstilistik）と命名されている²³。この方針は『言語理論』ではより鮮明で、特に音声の「表出」機能と関わる幾つかの点での修正が目立つ²⁴。例えば、音声における変動的要因と示差的要因を「音響相」（Klanggesicht）と「音素の人相書」（phonematisches Signalement）という用語で対照していることや、変動

的要因については更に恒常的特徴と非恒常的特徴を区別するために「相貌学的」(physiognomisch)あるいは「感情相貌学的」(pathognomisch)というような用語を導入していることなど、これらはヴェルナー(Heinz Werner, 1890-1964)の「言語相貌学」(Sprachphysiognomik)²⁵等の主張を強く意識した修正点であり、また『表出理論』(1933)²⁶とも直接に関連している。このように『言語理論』と『表出理論』という2種類の書物がほぼ同時期に続けて出版されたことや、用語の使用等に見られるその他の幾つかの変化を合わせて判断するならば、「表出」の問題を単に「叙述」との関係で副次的な問題として片付けるのではなく、「表出」も1つの自立した領域として扱うという新たな方向性が見えてくる。

3. 表出研究の系譜と体系

『表出理論』はビューラーの研究の中でも特にユニークな存在として目を引く。『表出理論』の理論的前提は先に指摘した記号概念そのものの分類と切り離せないが、「叙述」と「表出」という言語の意味機能の区別がすでに早くから意識されていたのとは異なり、身振りや表情等の問題に関するまとまった言及は『表出理論』以外の論文にはほとんど見られない。おそらく『表出理論』の具体化にはソシュールの「一般記号学」の構想が大きなきっかけを作ったのではないと思われる。『表出理論』の本文は200頁余りで、10章から成り立ち、その内訳は第1章が歴史的概観、第2章が「相貌学」(Physiognomik)と「感情相貌学」(Pathognomik)、そして残りの章が個々の表出研究家の業績の分析である。また巻末にはローマ時代の「弁論術」の理論家クインティリアヌスの『表情術と身振りの弁論術的使用』のドイツ語訳が掲載されている。ビューラーの『表出理論』に記号学の研究書としての理論的価値を与えているのは特に第1章と第2章であり、ここではまず表出研究において2つの立場が区別されるべきであると主張される。第1章で個々の表出研究家の研究の特色が歴史的な順序で概略的に示された後、続く第2章ではそれらが「相貌学」と「感情相貌学」という表出研究に見られる2つの立場に従って整理されているのである。

そもそも表出研究の古典的な例証は、アリストテレスのものとして断

片的に伝えられている「観相学」(Physiognomonica)に関する記述等に遡ることができる。アリストテレスの「観相学」は非常に広い範囲を扱うが、大別すれば、動物と人間の形態的比較、個々の国民の様相と性格の差異、個人における種々の感情や激情の変化の3つの分野から成立しており、後世の表出研究の基本的な方向はほとんどこれらに含まれている。ビューラーによれば、18世紀以降の近代的な表出研究には3つの波が確認できる。第1の波の頂点は1800年頃にあり、まずゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)、ラーヴァーター (Johann Caspar Lavater, 1741-1801)、リヒテンベルク (Georg Christoph Lichtenberg, 1742-1799) の3人の名前が挙げられる。ラーヴァーターにとって「観相学」は人間の内面を外見から推論するための科学であったが、ゲーテの「観相学」は、人間と自然との関係を科学的に究明しようとした「形態論」の発端であり、人間を描く芸術家として人間を取り巻くあらゆる諸条件から人間を解明するための方法論の1つであった。ただ、両者の「観相学」では、体型や容貌などの静的な要因と動作や表情等の変動する要因が明確には区別されてはいなかったが、リヒテンベルクはこれらを「相貌学」と「感情相貌学」の2つに細分化したのである。

ビューラーの『表出理論』で第1の波で特に取り上げられるのは、エンゲル (Johann Jacob Engel, 1741-1802) とベル (Charles Bell, 1774-1842) である。エンゲルは演劇研究家で、舞台上の俳優の演技を観察することを通して『表情術の理念』(1785/86)²⁷を執筆した人である。当時この書物は俳優のための教科書とみなされていたが、ビューラーはこれを高く評価し、「感情相貌学の領域での最初の近代的な体系化の試みであり、エンゲルの作品を研究せずに19世紀の表出論の歴史を知り、理解することはできない」²⁸と述べている。その最も大きな理由は、エンゲルが身振りや表情にも音声言語と同様の「叙述」と「表出」という記号学的な機能の区別に気付いていた点である。エンゲルは、人間の言語に「対象の観念を伝えようとする」働きと、「これらの対象によって心がどのように動かされるかを伝えようとする」働きの二面を認め、身振り言語においてもこれに対応する「描写的身振り」(malende Gebärden) または「模倣的身振り」(nachbildende Gebärden)と、「表出的身振り」(aus-

drückende Gebärden) を区別できると考え、更に音声言語に「命名語」(Nennwörter) と「指示語」(Zeigwörter) があるのと同様に、「描写的身振り」には「指示的身振り」(hinweisende Gebärden) を加えた。また、エンゲルは人間や動物が現前のものに対して取る行動の情緒的特徴を3つに分類し、「肯定的指向」(positive Hinwendung)・「否定的回避」(negative Abwendung) または「逃避」(Flucht)・「否定的指向」(negative Hinwendung) または「攻撃」(Aggression) 及び「拒否」(Abwehr) と名付ける。エンゲルの表出研究は、ビューラーが「身振り術 (Pantomimik) の行動理論」と呼んでいるように、身振りに音声言語と同様の伝達手段としての社会的機能を見ていること、あるいは身振りに伴う様々な徴候を行動の端緒・経過・目的という行動理論的観点から考察していることなど、幾つかの注目すべき見解が含まれていた。しかし「言語学では古典時代の純粋に記述的な文法体系が、比較言語学者や歴史言語学者が事実への展望を拡大したことや鋭敏な分析を行ったことの前に持ちこたえられなくなって、大幅に崩壊したように、エンゲルの体系も同様の結果となり」²⁹、時代からはほとんど置き去りにされてしまう。

エンゲルとほぼ同じ頃に表出研究に広い影響を与えたのは、イギリス人の医者ベルである。ベルは優れた比較解剖学者であったが、同時に芸術にも造詣が深く、本の出版の準備にイタリアへ研究旅行に出かけたほどで、『美術に結ばれたものとしての表出の解剖学と哲学』(1806)³⁰ という著書のタイトルもこれを物語っている。ビューラーは「ベルは近代的な生物学的医学から生まれた考察法によって表出研究を豊かにした最初の人物である」³¹ と評している。ベルは種々の生活条件が要求する様々な身体的機能を解剖学的資料と突き合わせ、中枢神経系の機能を3つの領域、すなわち感覚・運動に関わる基本体系、分泌・分解等を統一する共感的体系、呼吸・循環を統制する呼吸的体系に分割する。これらの中ではベルの表出研究で最も注目されるのは呼吸的体系である。つまりベルにおいては、顔の表情は「音声言語に並行する現象」であり、表情に関わる身体諸器官は「解剖学的にも生理学的にも発声器官と同じように呼吸に重ねられた器官」と考えられたからである。ベルの考察の特色は、医学的・解剖学的知識を基礎にしながら顔の表情を現象学的・機能的に

分析していることであるが、これらの近代的な視点は、残念ながらその後長い間正当な評価を受けることはなかった。

表出研究の第2の波は第1の波から約2世代後、ピーデリート(Theodor Piderit, 1826-1912)の『表情術と相貌学』(1858)³²に始まり、ダーウィン(Charles Darwin, 1809-1882)の『人間と動物の情動の表現』(1872)³³が出版されるまでの期間である。ピーデリートは医者で優秀な素描家でもあったという点でベルに比較できるが、ビューラーによれば、ピーデリートは「エンゲルの行動主義的な分析の糸を再び取り上げ、エンゲルが身振りの事実のみを理解させようとした行動の端緒という理念を一般化した」³⁴という意味でエンゲルの弟子であった。ピーデリートはエンゲルが「生理的身振り」(physiologische Gebärden)と呼んだ未解決の領域を医学的知識に基づいて考察し、目・口・鼻の周囲の表情を形成する筋肉を全体的に行動の徴候として捉えようとしたのである。ピーデリートが目指したのは表情的現象の諸要因の辞書を作成することであったが、ビューラーが注目するのは、彼の辞書では個々の表情的徴候の目録ばかりでなく、それらの徴候が現れる「意味論的場」(semantisches Umfeld)³⁵にも配慮されている点である。つまりピーデリートの辞書では、音声言語の単語の辞書と同じように、ある種の表情的徴候の意味が語源的、すなわち生理学的根拠によって「自義論的」(autosemantisch)に説明されるが、また別の徴候は特定の脈絡との協調関係において「共義論的」(synsemantisch)に価値が解釈されており、この点でビューラーの言う記号学の「公理論」の思想の先駆けでもあった。

一般にダーウィンの名は進化論の創始者としての名声に結び付けられる。しかしビューラーはダーウィンによる表出研究の書を「動物的なものに依存すると同時に際立った人間性を表出を基にして証明しようとする試みである」³⁶と評価する。つまりビューラーはダーウィンによる表出研究の書物からダーウィン独特の進化論的な色彩を排除し、純粋に現象学的なものを見つけ出そうとする。ビューラーによれば、ダーウィンは「同時代の人々の中で最も緻密で信頼できる、動物及び人間の表出の音声学者」³⁷であり、「表出に関する章で素朴な眼で見ることのできたもの、そして一度は見なければならぬものを彼ほどうまく観察し、記述

した人はいない」³⁸からである。ダーウィンは天才的な収集家であり、動物の表出に関する観察ばかりでなく、外地の宣教師や教師等に対して行った質問の回答に基づいて、全世界の人間の表出をくまなく資料として収集したのであった。しかしダーウィンは、表出運動を保存された習慣であると定義したことに典型的に見られるように、理論家としてはあまりに原始的な歴史主義に捕らわれていたために、生物学的には無用とみなされた表出の多くが、社会的な要求にとっては決して無意味ではないという事実気付かなかった。つまりダーウィンは表出現象を発生学的に追求することには成功したが、身振りが社会的役割を担っているという表出における音韻論の原理にはまだ合理的な説明を与えることはできなかったのである。

表出研究の第3の波は、1900年に出版されたヴント (Wilhelm Wundt, 1832-1920)による研究である。これは全10巻から成る『民族心理学』³⁹の最初の2巻に相当する部分で、副題は「言語」となっている。ヴントは「あらゆる言語は、音声の表出であれ、感覚的に知覚できるその他の記号であれ、筋肉の作用によって産出されて、内的な状態、種々の観念、感情、情動を外部へ表明するためにある」⁴⁰と定義している。つまりヴントにとって言語とは基本的に「表出運動」(Ausdrucksbewegungen)であり、音声言語は、観念を伝達するという点で特殊な位置を占めるものではあっても、それによって身振りや表情等と切り離されるべきものではなく、「表出運動」という共通の基盤によって連続したものと考えられたのである。ビューラーはこのヴントの研究を「貯水槽のように2つあるいは3つの歴史的な流れを統一し、それらの融合を完全に達成していない」⁴¹と評している。ヴントの表出研究は、エンゲルやベル等の過去の研究を再び取り上げて整理することによって、血液の循環と呼吸という生命に最も重要な部分の内的役割、顔の表情を形成する運動器官と、それらから生じる様々な徴候を扱う表情術、そして腕・脚・胴体の骨格筋肉に結び付いた身振り術という3つの領域に整然と区別されている。しかしヴントはいわゆる「精神物理学」(Psychophysik)の原理によって「人間という個体をまずそれ自体で完結した、学問的に孤立させ得る体系として考察している」⁴²ために、個人的・自然科学的に考察される

べき現象と社会的・精神科学的に考察されるべき現象が混じり合い、統一されるはずの体系に亀裂が生じることになった。

『表出理論』の第9章ではビューラーの同世代の表出研究者としてクラゲス (Ludwig Klages, 1872-1956) が取り上げられる。クラゲスの論文『表出運動と形成力』⁴³ はすでに1913年に発表されており、彼の研究は本来ヴントとその学派の「精神物理学」に対する批判的立場、すなわち独自の「精神-心理二元論」の立場で書き始められた。ビューラーによれば、「クラゲスの歴史的功績は、他の学者達が古い様式の実験からあらゆる利益を期待していた時代にすでにそれらの弱点を見抜き、新しい観察の可能性を追求して表出論の新しい公理論を研究した」⁴⁴ ことである。ビューラーが特に評価するのは、1世紀も前に演劇研究者エンゲルが俳優の身振り術の考察に用いた行動主義的な発端を再び表出研究に取り入れていることである。クラゲスは「随意運動」(willkürliche Bewegungen) と「非随意運動」(unwillkürliche Bewegungen) を厳密に区別し、行動においては人間特有の理性的要因とその他の要因とが基本的に対立していると考える。これによってクラゲスは、ヴントが信奉したダーウィンの定義、すなわち「数多くの表出形式はかつての意思行動の残存であり、動物には今もそれらを観察することができる」⁴⁵ という進化論の立場からの表出の定義を完全に拒否したのであった。クラゲスは、かつてヘルダー (Johann Gottfried von Herder, 1744-1803) が人間の言語の原点は感覚の叫びではなく、人間に本来具わっている「意識性」(Besonnenheit)⁴⁶ の作用であると唱えたように、人間の言語の特性を「叙述」に求めたのである。また「叙述」における「直観的空間」(Anschauungsraum) の役割の重要性に気付き、更に体験された感覚空間の形象に基づいてそれが形成されると指摘していることなど、「叙述」と「表出」という2つの面を現象学的な観点から機能的に区別していることも、クラゲスの功績として見逃せない点である。

4. 『表出理論』の現代的意味

『表出理論』には「歴史に示された体系」という副題が付いており、冒頭では「近代および古典時代の人々が人間の表出についてすでに知っ

ていたことを、今一度もしかすると新しい眼で見る勇気を見つけ出さなければならぬ」⁴⁷と述べられている。ビューラーがここで取り上げたのは、特に18世紀以後の代表的な表出研究家の研究であるが、ビューラーの『表出理論』はただ単にそれらを歴史的な順序で列挙して紹介しているのではなく、それぞれの内容の選択と整理にはビューラー自身の強い主張が込められているのが分かる。『表出理論』の翌年に出版される『言語理論』にも「言語の叙述機能について」という副題が添えてあるが、この本当の意味は、その書物の内容を理解するだけではなく、それが出版された当時の時代的背景と共に『表出理論』との対照を考慮に加えることによって初めて正しい文脈で捉えることができる。厳密に言えば、音声言語の機能は「叙述」に限定されるわけではないし、身振りや表情等による「叙述」の可能性が排除できるわけでもない。エンゲルの業績を紹介する際に述べているように、音声言語では「叙述」に関与する要因と「表出」に関与する要因とが「互いに補い合って1つになる」⁴⁸と考えられるし、他方、「身振りで描く手が、ある時は新鮮で陽気に、ある時は荒々しく、またある時はためらいがちに怯えながら、描くという行為を実行する」⁴⁹ことも可能だからである。確かに「あらゆる時代の言語学で言語の表出ではなく、叙述が前面にでている」⁵⁰のも事実である。しかし当然のこととして一般的に認められている「叙述機能の優位性を言語理論にとって実りあるものとするためには、まず包括的な比較をやるという勇気が示されねばならない」⁵¹と考えられたのである。つまり「表出」の意味を精確に知ることによって「叙述」の意味もより深く理解できるのである。この関連から見れば、ビューラーの『表出理論』は、「叙述」と「表出」という記号学の基礎となる区別と体系を身振りや表情のような非音声言語において改めて示した点において、言語研究にとってもまた貴重な意味を持っている。

ところで、プラトンの『クラテュロス』⁵²では「名の正しさについて」というテーマで登場人物が問答をする。そこでは物の名前がその物の自然な本性に由来すると主張するクラテュロスと、契約に基づいて定められていると説くヘルモゲネスに対し、ソクラテスがそれぞれの問題点を指摘するという形式で話が展開する。プラトン自身が『クラテュロス』

を果たしてどちらの立場で書いているかという問題になると、諸説入り乱れるというところであるが、少なくとも『一般言語学講義』のソシュールの立場はヘルモゲネスの側であり、そしてビューラーはクラチュロスとヘルモゲネスの双方を擁護する仲裁者の立場とでも形容することができるかもしれない。いずれにせよ、ビューラーの記号学の考え方には、『言語理論』でも「言語記号の3つの意味機能の各々が言語学の現象や事実の固有の領域を開き、主題として扱う」⁵³と述べているように、『クラチュロス』で展開される2つの立場が共に取り入れられているのである。ただ、ビューラーの研究を兩次大戦間という時代的狀況に遡って捉えるならば、『言語理論』の冒頭でも述べられている主観主義から客観主義⁵⁴への揺り戻しという図式、すなわち19世紀の進化論的な言語観の克服という一般的動向の中に位置付けなければならない。つまりビューラーの言語研究においてもソシュールと同様ヘルモゲネスの立場が優先されなければならない。しかしすでに指摘したように、言語研究において弁論術や修辞学等の分野を見逃さなかったこと、そして身振りや表情等の表出研究を『表出理論』として整理したことなど、ビューラーの言語研究が慣習的・社会的な面に考察を限定していない点が、現在の視点からはむしろ新鮮にすら感じられる。ビューラーはソシュールが提起した記号学という新しい学問に具体的実現への1つのモデルを与えようとしたのは事実であるが、現在の私達にとっては、これを単なる歴史的事実として整理するだけでなく、「新しい何かを言うことのできた少数の人達の着想をもう一度考え抜き、まさにこの新しいものの根本を発見することを求める」⁵⁵ことこそが課題であると思われる。

注

1. F. deソシュール『一般言語学講義』小林英夫訳 1972年 岩波書店。
2. (同上書 20ページ)。
3. (同上書 21ページ)。
4. (同上書 21ページ)。
5. Vgl. Bühler, Karl: *Das Ganze der Sprachtheorie, ihr Aufbau und ihre Teile*. In: Bericht über den XII. Kongreß der deutschen Gesellschaft für Psychologie, 1931, S.99.

6. Ibid., S.95.
7. Bühler : *Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache*. Jena 1934. 邦訳『言語理論—言語の叙述機能』脇阪豊他共訳 1984年クロノス.
8. Vgl. Bühler : *Kritische Musterung der neueren Theorien des Satzes*. In : Indogermanisches Jahrbuch, Bd.6, 1918.
9. Ibid., S.1f.
10. Ibid., S.3.
11. Vgl. Bühler : *Über den Begriff der sprachlichen Darstellung*. In : Psychologische Forschung, Bd.3, 1923.
12. Ibid., S.286.
13. Ibid., S.283.
14. Ibid., S.283.
15. Vgl. Bühler : *Die Krise der Psychologie*. Stuttgart 1965, S.45ff.
16. Vgl. Bühler : *Phonetik und Phonologie*. In : Travaux du cercle linguistique de Prague Bd.4, 1931, S.37ff.
17. ソシュール『一般言語学講義』182ページ.
18. (同上書99ページ).
19. Ammann, Hermann : *Die menschliche Rede. Sprachphilosophische Untersuchungen*. Darmstadt 1974.
20. Vgl. Ammann : *Die drei Sinndimensionen der Sprache. Ein kritisches Referat über die Sprachtheorie*. In : Karl Bühler's Theory of Language, Proceedings of the conferences held at Kirchberg, August 26, 1984 und Essen, November 21-24, 1984, Amsterdam 1988, S.54ff.
21. Vgl. Bühler *Phonetik und Phonologie*. S.52.
22. N.S. ツルベツコイ『音韻論の原理』長嶋善郎訳1980年 岩波書店.
23. (同上書17ページ).
24. Vgl. Bühler 1934, S.271ff.
25. Vgl. Werner, Heinz : *Über die Sprachphysiognomik als einer neuen Methode der vergleichenden Sprachbetrachtung*. In: Zeitschrift für Psychologie Bd.109, 1929. *Sprache als Ausdruck*. In : Bericht über den XII. Kongreß der deutschen Gesellschaft für Psychologie, 1931, S.201.
26. Bühler : *Ausdruckstheorie. Das System an der Geschichte aufgezeigt*. Stuttgart 1968.
27. Engel, Johann Jacob : *Ideen zur Mimik*. Berlin 1785/86.

28. Vgl. Bühler 1933, S.32.
29. Vgl. Bühler 1933, S.52.
30. Bell, Charles : *The Anatomy and Philosophy of Expression as connected with the fine arts*. London 1806.
31. Bühler 1933, S.53.
32. Piderit, Theodor : *Mimik und Physiognomik*. Detmold 1857.
33. Darwin, Charles : *Der Ausdruck der Gemütsbewegungen bei dem Menschen und den Tieren*. Stuttgart 1872.
34. Vgl. Bühler 1933, S.73.
35. Vgl. Bühler 1934, S.154ff.
36. Vgl. Bühler 1933, S.92.
37. Vgl. Bühler 1933, S.99.
38. Vgl. Bühler 1933, S.99.
39. Wundt, Wilhelm : *Völkerpsychologie. Eine Untersuchung der Entwicklungsgesetze von Sprache, Mythos und Sitte*. Leipzig 1900.
40. Ibid., S.31.
41. Vgl. Bühler 1933, S.128.
42. Vgl. Bühler 1933, S.133.
43. Klages, Ludwig : *Ausdrucksbewegung und Gestaltungskraft*. Leipzig 1913.
44. Vgl. Bühler 1933, S.3.
45. Vgl. Wundt, S.73.
46. J.G. ヘルダー 『言語起源論』 大阪大学近代文学研究会訳 1992年 法政大学出版局 30ページ.
47. Vgl. Bühler 1933, S.2.
48. Vgl. Bühler 1933, S.39.
49. Vgl. Bühler 1933, S.39.
50. Vgl. Bühler 1933, S.XIII.
51. Vgl. Bühler 1934, S.150.
52. プラトン全集 3 『クラテュロス』 水地宗明訳 1998年 岩波書店.
53. Vgl. Bühler 1934, S.32.
54. Ibid., S.1ff.
55. Vgl. Bühler 1933, S.3f.

その他の参考文献

- R. ヤコブソン『言語とメタ言語』池上嘉彦 山中桂一訳 1994年 勁草書房。
L. クラーゲス『表現学の基礎理論』千谷七郎訳 1968年 勁草書房。
W. ヴント『身振り語の心理』中野善達監訳 1985年 副村出版。
入谷敏男『記号論・表出論の系譜』（『理想』第597号、28ページ）。
A. ヴェレク『ルートヴィヒ・クラージェスと現代』（『理想』第475号、88ページ）。
Jakobson, Roman : *Semiotik. Ausgewählte Texte* 1919-1982. Frankfurt am Main 1992.
Kirchhof, Robert : *Ausdruckspsychologie*. In : *Handbuch der Psychologie*, Bd.5, Göttingen 1965.

Die Semiotik des Ausdrucks

in Bezug auf Karl Bühlers *Ausdruckstheorie*

Kiyoshi YAMADORI

Karl Bühlers *Ausdruckstheorie* (1933) ist eines der wichtigsten seiner Werke. Aber im allgemeinen ist das Buch weniger besprochen als seine *Sprachtheorie* (1934). Der Grund dafür ist wahrscheinlich, daß dort Gebärden und Mimik als eine Art von Sprache behandelt sind, aber die Sprache, die menschliche Lautsprache, ganz ausgeschlossen ist. Die beiden sind aber in Bühlers Forschungsarbeit eng miteinander verbunden.

Den Ansatz zur *Ausdruckstheorie* findet man in der Konzeption der allgemeinen Zeichenlehre, die von F. de Saussure in seinem *Cours de linguistique generale* (1916) aufgezeichnet wurde. Er sagte darin, die Sprache sei ein System von Zeichen, die Ideen ausdrücken und insofern der Schrift, dem Taubstummalphabet, symbolischen Riten, Höflichkeitsformen, militärischen Signalen usw. vergleichbar. Er stellte dabei eine Wissenschaft, die das Leben der Zeichen im Rahmen des sozialen

Lebens untersucht, vor und nannte sie Semeologie. Seiner Meinung nach gehört die Sprachwissenschaft zu dieser allgemeinen Wissenschaft und spielt darin eine führende Rolle.

Diese Konzeption richtete sich gegen die damalige Sprachwissenschaft, die im 19. Jahrhundert nach naturwissenschaftlichen Methoden nur konkrete Erscheinungen und Elemente in der menschlichen Sprache untersucht hatte und sich schließlich in ein paar Teilwissenschaften wie Psychologie, Physiologie u.a. aufzulösen drohte. Also bemühte sich Saussure darum, den Gegenstand der Sprachwissenschaft aufs neue abzugrenzen und ihre Selbständigkeit wiederherzustellen. Dieser Versuch hatte zwar auf einer Seite Erfolg. Denn die Sprachwissenschaft bekam damit die sogenannten strukturalistischen Aspekte, die die Richtung der Sprachforschung im 20. Jahrhundert bestimmten. Aber auf der anderen Seite zeigte man, besonders im Gebiet der Sprachwissenschaft, für die Konzeption der allgemeinen Zeichenlehre nur wenig Interesse. Das hängt damit zusammen, daß Saussures *Cours*, eine postume Veröffentlichung durch seine Schüler, in einigen nicht unwesentlichen Punkten seinen Grundgedanken nicht immer korrekt vermittelte.

Daher verdient es Beachtung, daß Bühler schon damals die von Saussure nur entworfene Konzeption für ernst nahm und sie auf seiner Weise weiterentwickeln wollte. Aber es gibt noch eine zu bemerkende Tatsache darüber, was man unter Zeichen versteht. Saussure betrachtete die Sprache als soziale Einrichtung und betonte dabei den willkürlichen Charakter des Zeichens. Demgegenüber ist der Zeichenbegriff von Bühler etwas weiter als der von Saussure. Er fand nämlich als Psychologe auf seinem eigenen Forschungsgebiet Zeichenhaftes weit über die Sprache in dem gewöhnlichen Sinne des Wortes hinaus verbreitet. So unterscheidet er Anzeichen und Ordnungszeichen. Denn die Zeichen fungieren als Symptome, wenn es zwischen Bezeichnenden und Bezeichneten eine Abhängigkeitsrelation gibt, aber sie sind auch

willkürliche Zeichen, wenn die Zuordnung des sinnlich Wahrnehmbaren zu Gegenständen und Sachverhalten konventionell bestimmt ist. Sein Organonmodell, das drei Sinnfunktionen der Sprachzeichen, Darstellung, Ausdruck und Appell, zeigt, beruht im Grunde auf diesem Gedanken. In dieser Hinsicht hat jede der drei Relationen ein eigenes Gebiet sprachwissenschaftlicher Phänomene und Fakten. Er dachte deshalb, auch die Ausdrucksforschung sollte in der allgemeinen Zeichenlehre den gehörigen Platz nehmen.

Bühlers *Ausdruckstheorie* behandelt einige wichtige Untersuchungen seit dem 18. Jahrhundert über Mimik, Pantomimik und andere physiognomische Erscheinungen. Aber sie ist nicht zum allgemeingeschichtlichen Ziel geschrieben, Abhängigkeiten nachzuweisen, sondern er versuchte, das Konzept der wenigen, die etwas Neues zu sagen hatten, noch einmal durchzudenken, um nichts anderes als dieses Neues an der Wurzel aufzudecken. In der Sprachwissenschaft ist seine *Sprachtheorie* sehr bekannt. Demgegenüber ist bisher auf seine *Ausdruckstheorie* gar keine Aufmerksamkeit gelenkt worden. Aber er hielt den Ausdruck als Teilgegenstand der ganzen Forschung gleichwertig wie die Darstellung. Er hat damit die alte Einsicht über die Richtigkeit der Namen, die einst in Platons *Kratylos* gezeigt wurde, aus dem modernen Gesichtspunkt heraus von neuem beleuchtet. Das kann man als beachtenswerten Beitrag zur modernen semiotischen Forschung einschätzen.